韃靼勝敗記

一

海外路菴説

韃靼勝敗記

墨堤舍梓

三 廾

詩ハ声阿る畫畫ハ象
なきの詞とも文とも出来
實ニ都くる詩乃まゝをつたふる
なるその乃ミにあらず画を
伺ふ筆跡を机上よ業里乃

遠氏綿の露に芳とおり
祝聴りこへし出文即是也
楚もく昇平し久しく
民人枕を高うして腹を鼓し
千代まても喜能堂民まてを

志らぬ者は何も是此花の郁まる所を
とんきて吾妻此治世の気ふ悦
思ひ心なき所ろし便を修く
名に職を惜しみやらんこと
こ於孫りきし行雄

支那韃靼喀爾喀王
しなだつたんの
かるかわう

法王噠嚬喇嘛 ほふわう だらいらま
大元師麻辣抜児 だいげんすい まらぞる

大清謀臣繞州巡撫趙元宗
大清猛將爻丹城主孟帝良
ロノ三

大清智勇将黒龍城主司馬翼
同夫人幹氏

喇嘛奸臣墨児蘭
らまのかんしん
めるらん

韃靼英雄烏斯坦
喇嘛勇臣火單
火單嫡子單殺得

韃靼勝敗記惣目録

巻之三

巻之四

巻之五

目録終

穆彰阿耆英二臣論

太清道光三十年十月廿八日

任賢去邪人君之首務也去邪不斷則任賢不專方今天下因循墮廢可謂極矣蓋治月壞人心日澆是朕之過然獻可替否匡朕不逮則二大臣之職也穆彰阿身任大學士受累朝知遇之恩不思共難共愼同心乃保位貪榮妨賢病國小忠小信陰柔以售其奸僞學僞才揣摩以逢王意從前夷務之興穆彰阿傾排異己殊堪痛恨如達洪河。姚瑩。之盡忠有礙於

已必欲隱之者英之無耻喪良同悪相濟盡力合心
似此因貝寵竊權者不可枚舉我
皇考大公至正惟全以誠心待人穆彰阿何以肆行
無忌若使
聖朝早燭其奸則必立置重典斷不姑容穆彰阿特
恩益縱始終不悛自本年正月朕親政之初遇事摸
稜鍼口不言迨數月後則漸施其伎倆如英夷船至
天津初猶欲引者英為腹心以遂其謀欲使天下群

黎蠹食荼毒其心陰險寔不可圖潘世恩等保林則
徐則屢言林則徐柔弱病軀不堪錄用及朕派林則
徐馳赴粤西剿辦土匪穆彰阿又屢言林則徐未知
能去否偽言熒惑使朕不知外事其罪寔在于此至
若耆英自外生成畏葸无能殊堪詫異前在廣東時
惟抑民以奉夷人罔顧国家如進城之説非明驗乎
上乖天道下逆人情幾致變生不測賴我
皇考燭悉其偽速令來京然不即于罪斥亦必有待

也今年耆英召對時數言暎夷如何可畏如何應支周旋數朕不知其奸欲常保禄位是以喪盡天良愈辨愈彰直同狂吠尤不足惜穆彰阿暗而難知耆英顯而易著然而貽害國家厥咎維均若不立申國法何以肅紀綱而正人心又何以使朕不負皇考付託之重歟穆彰阿三朝舊臣若一旦置之重治朕心寔有不忍着從寛革職永不禄用耆英雖无能已極然究屬迫于時勢亦着從寛降爲五品

頂戴以六部員外郎候補至伊二人以私欺上天
下所共見者朕不為已甚姑不深問弁理此事朕熟
深慮計之久矣不得已之苦衷尓諸臣其共諒之嗣
後京外大小文武各官務當激發天良公忠体國俾
平素因循取巧之積習一旦悚然即悔毋畏難毋苟
安凡有益于國計民生之大端者直陳勿隱毋得仍
顧師生之誼援引之恩守正不阿靖共尓位朕寔有
厚望焉布告中外咸使知朕之意特諭

右ノ如ク北京ノ新帝即位ノ肇メ奸臣ヲ諭シ叙爵ヲ換ヘ國政ニ震襟ヲ碎キ玉ヘドモ一治一乱ハ天ノ定數ニシテ何ゾ人力ノ及ブ處ニアラズ聰明英主ト雖ドモ是ヲ免ガレザルハ古今相同ジ咸豊爺ノ賢ナルハ此勅書ヲ以テ推テ知ベシ

墨堤會敬白

韃靼勝敗記巻之一

○韃靼地名の事

抑大韃靼と云ハ中北亜細亜の総名にして其部内数十国に分れ　皇国に属せる有り支那に属する有り魯西亜に属せる有り又独立韃靼と惣称して支那及び魯西亜に属せざるの国七ツあり其内すべて数定らずまで各国王あり魯西亜韃靼独立韃靼ハ先閣く支那に属する韃靼を数へ挙るに其国五ツ朝鮮。満洲。蒙古。喀爾喀。薩哈連（一名ハ東韃 又蝦夷地）なり是を指て支那韃靼と云人皆能知てある上に長髪を使ふ其国王を尊称して大汗と云その中に

押て南京府を攻め此所を新都とし年号を天徳と立て風俗衣服も先朝に復し専ら仁政を施し武威を隣国に赫きその徳を慕ふて麾下に馳集る者算ふるにいとまあらず是に続て内地十八省の多くの諸侯より北京へ告ぐる事檄の書を飛よりも打捨し帝を始め欽差諸大臣大いに驚き軍議評定區々なるに彼満州一の都府遼東王が不打到来して韃靼の内喀爾喀王 互違を全く思鄂羅斯を攻るのみを添へり

○韃靼勢黒龍城を攻る事

喀爾喀王は数代大清に属し連綿たりしに今東去

清の苛政に因て国窮せし上此比中華に騒乱ありて課役
繁ければ国倍々国窮し老を養ひ幼を恵しむの術なく
壮者ハ家業を棄て他に走り老弱ハ餓死するに至る爰
に於て客爾客王大に嗟嘆し咸豊二年壬子の
冬義旅役の民を集めて衆に誓して曰我国ハ累代を清乃
藩屏に属すと雖とも今清の苛政に因て国窮し既に下民
餓死を免れざるに至る君暴にして民を虐けるハ古賢の戒めし
て武王紂を討ども反逆の名なし仁を賊ふ者を一夫といふ
一夫紂を征して却て美名を後世に残せり我家元より
清ハ三代相恩の主人にあらず時世によりて隷下に侍する

支那韃靼喀爾喀城中大評定の圖

龍城に於て熱河禦守第一の要地なり是ハ北京藩代の守衛司馬晉
ようを擬代として居置き又彼の内寧古塔に守清の守
祖帝隆盛の地にして数代小京帝の連枝を置く当時恭
親王同じく小方の乱地変を鎮護も同じく遼
東の要害守第一の地にして是亦王族をもって居る同じく吉
林是に次ぐ藩代の信是に居り今此宝器を挙ると雖ば
西又北京へ海へ討てを為んとする事あらば漢州へ攻
へ始め寧古塔より吉林遼東を元とし後で小京を襲ひ中
華委く平均せんと扎速まで百四五十る事まで出で馬児
罕かんに向ひ中ろうん黄色の守備を極せらるゝ今も

ヤさ夕ゝ通り黒龍江當時の従軍司馬翼しんハ兵を乗る勇
無二の人なり我軍勢をまづ海岸を討んとして黒龍江より
後詰せバ味方難戦ならんと報道す喀爾喀王是を聞て
て我海賊も皆ことごとく残りなく黒龍江を攻べし去るほど此地
寧国にて雪深く今年まで軍を出せるが成難ければ暫く暖
和の折を待て軍を出すべしと評定一決して出陣の用
意をなしけるに是より先咸豊三年四月上旬
檄文を作て鏡覩列国の諸侯へ黒龍江征討の旨を觸より
し比亞皇帝弗剌廉だら門流の諸将を率て一堂に集
那亞り是を聞て列国の諸侯悦でこれ是に與て既に

喀爾喀王ハうち立て軍勢を万頭揃へて加兒川原まで押出しけれ
バ一味合体の諸軍我劣らじと勢備り軍威日々に盛に
戦ぎして多くの軍勢を将て倒山破濟の勢ひにて黒龍城
をさして押寄んとす此時黒龍城に於てハ城代司る
翼ハ世に聞ゆる大勇剛の将なりしが少しも騒がず色
されども先此方より北京へ早馬を以て注進に及び防禦の用意
とゝのへて日を経て雑兵勢黒龍城へと押寄る司馬翼ハ
中途に勢を分けむして全ての兵を既に兵勢を付と号して
鉄砲を打掛炮煙の未だ納らざる間に弓矢より上にて長鎗を
うちふり数十合かして勝敗なくされども日已に暮に及ん

で我が勢を引揚る雑兵勢は日を追て勢加り権威を示し
ゐたり然ども黒龍の城代司馬翼しだ元来勇剛逞しく殊
に軍勢も多からざれバ少しも懼るゝ色なく防戦為ける
なる上ハいつ果べき方もあらざりければ喀嘯喀王ろう咄
喇嘛らまどうらんと為して軍議を凝し新勢二手に分て一時
に攻落さんと押寄たる城ね将も携まで二方共に中途に
待受出て相対して実戦を中にも大きに向ひし雑兵勢勇
ミを含んで雑兵を切まくる城兵対し難くやゝもすれば討死
ま敗走ければ足元定まらず逃ぐる雑兵勢勝に乗じて
とどめたるを知して此機を外さず追討て城中に討入一

息の緒絶まじと砕砲打振退まくりて一ツの廣野に駈出て
捕もらさんとする所に鐵砲の剣を着刺斬ずらと名乗て免ろ
てぞ起し散々に戦ふこの隙に銃砲手さし〳〵待へを立直し〳〵
互を詮と戦へバ雜兵勢も踏込く切まくさしめ廣き
野らまでも尺地も弥らく元肉より此時銃砲の後陣より
西洋流の天地に強薬を込で天地も裂るばかりに打出す其
雷震中を鳴響て飛来りて廣野の中に落ると等しく
ひとつの地雷火地中より憤発し大勢二三丁に飛布て
雜勢是ふ手足を焼ともめく所に其火焔の猛るに又
一ケ所の地雷火憤発を飛りと是ども死を顧りみぬ雜兵

構味方を励し戦ふ事又地雷火懐陥都合十余ヶ所の地
雷火に広所ことごとく大は敷く大砲信く轍ろまべ所を
種く其の人ども士卒麋爛して戦ふこと能はず乱きこて敗
走されども城兵も火を踏で是のる能はずまべ又大筒を打
掛るのみ於務門を作り勢をまとめて城かた陣を又城の東北
より寄する一手の雑兵敷勢操る様ぐ攻ぬ奪ふべ城兵同じく
対戦し鉋戦終りて楯竹束を打捨て其擒を交へ挑きたく
うへの陣は是れる所よ城兵の出張し陣所の遠浅ろま九二
三十ヶ所の大ある石礫荒木を以く織て築きするのりて
雑務是なりんて悟しき思へども為て軍勢を籠置しつえ

あくじん又長蛇大嶺の絶へありとも見へざるよ赤ぶる万も盡
されバ是等のるいハいづれも留ぞ勇を励し切伏突伏よ痛く
血戦せしらバ敵者備り將て一挙に逆亡る雑勢手を漏て
鶯直あり直廻る彰しも坤の風烈しく吹起る又彼二三十の
高櫓の上より胡椒あるひハ蕃椒の粉を散しく撒ちらしも
雑将ハ西南に向つて立む所よ風上より右の粉撒散され
鼻よへハ入咽そり剥へ目を開く事能ハず惣勢眼を
塞て一寸先の闇と成敵者是を見てとく起て匹し突掛るぞ
雑勢なれば溜るべき右往左往に敗走を残りて退ける司馬翼
しバよく智勇兼備の名ちろまバ少く匠ぞ残能勢を引揚る又敵

の西北より向ひし雑勢も同じく先には牛皮楯をもて毎に
おせ鉄炮矢をふせぎ頻りに両陣に備へ攻掛るに此手の大将
司馬芭なりも悪く備へしを然れ共せし鉄炮を打掛ながら
くり引に陣を退けしは元来勇に名ある雑兵勢軍ハ稀
なるぞ名をあくと下知を返し敵の退くは従ひ追かけ此の
程廿里計も乱れしに寒河とて幅七八里もあらんと見し
き大河あり不思議なるは水僅に膝を浸をばかりなるは
巡撫河の前途に踏留まりて一寸も引じと悪し戦ひけ
大河の名あるは河原あるまゝ是元に渡るありく手ハ不意返
自北と将く退きつる處勇化の戦ひは時を移も此

司馬翼の智計
韃靼勢を川中に
溺死せしむる圖

の権を寄しめバ忍びの冰ろ句海偏歩を擒て北京を攻平たるに安んじんと亟丸れバ巻偏察王のごとくに喧嘩喇嘛らきもたるに據びる手を拍て舞なりあるたりて忝く麻錬抜児まると疾しめんと馬児罕に顔物を於て亟ぢるに杭愛山の麓へ翫られむ

韃靼勝敗記巻之一終

韃靼勝敗記

二

韃靼勝敗記巻之二

○寧嘯寧王麻喇援児をまねく事

黒龍城代司馬翼ハ十分に鋒利を得て韃靼勢も遠く陣を退けしかバ三男の出雲の勢と城中より應して軍勞を揫め此趣を北京へ訴へ後戦の術をはかりしかバ寧王山の麓なる麻喇援児が廬に赴きし馬児罕鎮の幣物と衣服を贈り日を移で麻喇援児の許に〆あらく安閑自若しけるが麻喇援児自ら出向へ來り何方より來るやと問ふ馬児罕答へて曰く我ハ寧嘯寧王うるうんの麾下に馬児罕と申者也主君の命をうけ

政に暴りし餘の罪にあらずて主義喀嘯喀王あるひは清の
王威衰へ苛政にして貪吏權を恣にし民の困窮泥難に入
るに惡ひぞ義兵を舉て既に要務滌に抑寄して要務識
なれ北京の名ね司る蓋しよく揖務り此度の合戰味方勝が
智計に陷りて悉く敗亡も是唯君ら統軍師なきが故也
吾義我君の軍を援けて民の塗炭に落入を救ひぬへきの
使なりと理を盡して述ぶれば麻羅拔児完示として
喜へて云るう我此頃山に寄り天機を窺るに北京の後世既
に一變の時至るなれども中華の南天に祥瑞の氣盛なるを且
勝り是則王政を當る所の氣あり中央より殺氣除くとして

北虜滅亡の時至るべし北方に鬨声起りて騒乱に兵
乱の起らん事あらざるべからず我元来大清の虐政を悪み
て山里に身を隠すといへども紂の無道を東海に避けし文
王に仕へし太公望の例もあるべき事ゆゑ喀爾喀王の
臣とならんやと云ふ馬児罕ます〳〵大に悦び二将を稽首して
貴将すでに疑ひなからん我君の宰相使者の面目を施すべく
さて是則天命なりと直に伴ふて軍勢を引き陣に
斯の喀爾喀王へ斯と告げしかば喀爾喀王も
歓び斜ならず陣門に出向ひ宴を設けしかば麻棘撥児も
大王の誠心を感じ主従の約を結び直に大元帥に任じて

ダツ二ノ四

嘛辣拔児幣せし
まてく喀爾喀王の
陣中ゟ来る図

ごしとれ是非の事をきらんと歎息しながら呂羅を引収め
程なく諸戦息みて後迴鍵の大軍師麻練按児まらあるも敗軍を
集めて引退き陣をまた不来して曰く敵将は後悔をさせしめ
しれ我謀成就をきてまありと悦びけり

○黒龍篠旋のみ

蟷螂蝉を窺へば野雀蟷螂を窺ふと宜なるかな黒龍の縦横
代司馬懿よくしらべ智謀を以て羅雀勢を張らせ天羅鍵は麻
練按児まらあるの部りてより陣営を設け段ならま其智謀よ
敵の謀略を悟りなし難く三軍に切捲りし麻練按児まらあるなれが
能く謀りし事なれバ再び城攻の用をとして先より呂羅

攻ゆる敵を切伏突伏城に入て是までに三三の廓二十餘
ヶ所の櫓よりは火氣煽くと燃上り僅に本丸のみぞ殘り
ける後よりは鹿棘拔児まで責寄せけるにぞ且手までは火を
防ぐに隙なく既に本丸に追入て城門堅く閉鎖り鐵
炮大筒を打出し必死と成て防ぎ戰ふにぞ雑兵數多討
怯みて見く見れば麻棘拔児まで下知して曰く窮鼠却て
猫を噛の譬へあればなまじ攻討ずとも味方十分の勝利
なればまづ外廓を味方の物とし軍を屯し是を足掛りとして
たとひ敵如何に猛勇なりとも争でか保つことを得んと
外廓より悉く退けさせ其兵勢を分て火を消さしめ士卒の労を

侍める有る翼しバ是既に討るべきなと争ふして血路を開き和泉守引一く味方を励まて傑る人ありけるが手府を憲る者多くしてふたゝび合戦して経継勢と退んとせし思ひしもあらん離れて此丸下をちり備戦するところ経の惣勢八方より攻掛りバ一時も猶予べしとも見えねバ諸将を集めて告て曰く我智恵浅くして敵の為に欺かれ武略の如く寡勢に迫るのミならず乃軍勢と戦ひ剰へ平清盛の要地を敵の為に陥し入らるゝは是皆我罪なり依て我を一刀づゝ切て此怨を散ぜよ我死して後此首を東国に携へ帝の逆鱗を宥めよく謝

黒龍城主司馬翼
最期酒宴ニ妻室
幹氏歌舞の圖

こそ見へさりけれ遁れ口惜と味方の中を馳抜て又押寄る敵
勢に面も振ず切入て敵数多を討取しが身に数ヶ所の手負ければ今は
是までなりと自ら腹かき切てぞ死しける司馬遷
是を見て嗚呼憐むべき若者かな彼は誰が倅なるやと
問る所に古寺某人縋りて大将の前に出只今討死あり
し人は幹太人にて君の御恩を報ぜんと出陣を願ひしも
ありしが捨りとて後は悪念にて父母を見捨んより君に見えて
討死し忠節を励まし二つには後世を思ひ烈女の名をのこ
さんと姫じと此文を遺して出陣し御恩の為に討死あり
なりと一通の文を捧る司馬遷是を開き見るに女の情

羅金徳韃靼の陣屋ニ夜討をおして敗軍乃圖

して此度の一戦に韃靼勢を鏖にせんと鋒先鋭に攻立ければ
その必死の戦に韃靼勢も敵しがたく右往左往に逃失ける

韃靼勝敗記巻之二終

韃靼勝敗記
三

韃靼勝敗記巻之三

○艾丹落城の事

艾丹の寄手は後に敵ありて進退自由ならざりしに羅金徳ら無謀の征討して却て麻辣抜児が計策に落入り都をさして逃帰りしかば嘲弄を受くるしき鬱悶を絶り勢を纏めて麻辣抜児ならと一手になりて攻るといへども城も要害堅固にして其上討て出る事なくかたく守りて防戦計りなれば攻る度毎に兵を損ずるのみにて未だ必勝の理を究めざるに城中よりは羅金徳らが敗走せしと聞てより少し恐怖の心出来て人心匪て不揃て見へれ

は麻辣撥児今ぞ堡の討がたく所なりと堡の中へ令
物訓くる逞兵二万餘騎を揃り出して堡を援け夜ヲ給
まてく丘くに討立て其世諸る勢を下知して城の三方より
尺地のあるなく押寄て石火矢鉄炮を打掛攻ること急
なり城中よりも大熕天炮ホを打出し防ぎ戦ひ寄手いと
負死傷多しと雖ども元来大軍なれバ新手を入替く
既ホ外廓の屏際をく迫る所へ後陣の方より二三万老
軍勢を清の旗を指上て喀爾喀王の陣ヲ突掛りし
うバ難の後陣大ヲ騒ぎたる防ぎ戦へども當るべくもあ
ざりバ中を開く無しも北京勢直さだ中陣へ攻掛り勇

ゝる羅金徳が勢に城兵多く敵を支へき武勇の者ハ
無げ衰ひまゝ亡者もありけり羅金徳其勢の中と
引て大手の城門を堅守ハ城中を飛上り双向ふ者ハ切倒し
女童ハ擒よりも臣出を城かふの雑兵と云まゝ乱入く
切結ぶ雑兵の軍師麻辣援児まゝ敵に向つて大音上海赤濃
と罵らずや此に羅金徳と名乗ハ此方の旦し看そ
海蔵を假り出し城ハ早此方の物と成り何を漂ひり合
戦とまゝ如く敵勢一同に落ひ乍る此時城将亜牌良後
と振そり櫓の上に登るを見て作天一叔々麻辣援児まゝるに
出しぬけまーしり無念とまよしや軍令なを守るとし再び城下に引入

て敷羅金強らさんと刺違へ城を枕ニ討死してこそ武士の本
望なるとも士卒に下知しけるが引退きんとして味方と見えざれハのミ
難きハ人心今を限りと猪ひ勇気りんりんとして大勢をかきわけ進て散々落失
て手勢僅で守りける重神良あうちう猪く懸ども候矣あまく
術兵を集めつ城門をとく引退せざれハあはてゝ悵狩りける橋の
上より敷の羅金強らさん躍り出て城将重神良あうちう続く
敵りまち続くハ軍師の下知と受小宗勢の真似をとして浅を
城和く納出せしハ皆謀あり勤息しても手く討死せんと大
音ふ呼わり弓鉄砲を打出し寄付ども背ろよりハ雑の大勢
微のごとく攻来る重神良今ハ討死と覚悟してむまと

太清の忠臣艾丹の
城主孟仲良血戦
討死の図

奮起し群る敵の中へ突入て敵数十騎打ち阿修羅王の
荒るごとく敵の中を竪横に馳廻る時勢ひに辟易しも
者もあれば不運命の尽る所にや何国ともなく流矢来り
胸板にぐさと立し所さすがの堪り得ずして馬より真逆様に
落て死したり雑勢の中より一人走り寄て董仲
良が首を打落し高く差上大音上艾丹の大将董仲
良を討とりたり仲良が残卒是を聞て[illegible]
相討又刺違へ乱軍の中に討るゝもあり其外喉を射られ討死
されば雑の総勢一同に鯨波を揚て城中よりも同じく鬨
波の声を合せ城門を開き出ければ皆城中に入て人馬の疲

望あるべしといふにこれハ汝嗹嗽喇嘛ぐらんき精く思惟し
てみるに其儀尤ありとおもふ今国領女丹の古城を治め数城
とはて文支那韃靼に敵する者なりけれども未だ民心懐
ざれバ若も反人の者出来らバ是迄の戦労空しか
らん然る君ハ軍師となりて国城に於て居まして黒龍城
へも下知を傳へ民心を懐け且ハ中原より討手も向ハず
防ぎ給ふべし某ハ門下の勢を率て寧古塔に向ひ縁
討をふせぐ手に入んと要るまでハ軍師麻辣援児も
此儀ハ同じ軍議一変すれバ嗹嗽喇嘛ぐらんを八万の軍
勢にて寧古塔を攻べしと其用意をなして

○北京英吉利に加勢を乞ふ事

咸豊三年五月に至り賊ハ愈猖獗し遂に天国と称し今
既に艾丹を攻来りて諸処陥落として羅金諸郡
しま無儒の疾財をもつて却て軍の被ましく敗北して北京
に迫りしかバ朝廷より議して禁門を以て御器への兵を
催すり四方より兵を集め
攻入べき旨を伝ふ又南京の兵も
勢ひ盛んにして攻難きを江西諸処も加勢を
乞ふものゝ南北に寝食おのく万民安居するの時
何れか征討して可ならんやと論ずれバ

ダッミラ十

趙元宗南京勢と破る圖

宗も一旦は勝利を得るといへども洪武が智
謀を逞しく陣下を固め日を送りける武略も今
尽し後明用兵於るゝ改身不隙なき於りけれバ敵のすく
まぬを幸ひとして戦ひを好まざれバ我も出陣をなさん欲討
船艦の要んの下知を待へ對陣をなしにけり

○英吉利勢黄河口に寄る事

去る程に空州の英艦不残出し表済は日数を経て北京
に至り英吉利合衆の旨委細に勅書されバ咸豊帝
を交ずり諸長大に勇み英吉利加勢して黄河に淮安に
押寄なバ南京のりうぐ勢を分て黄河口に向べし南京軍

黄河口の戦ひに李伯玉謀て英国の軍艦を奪ふ図

敵と鏖にせんと怒りあらはるべし、しかるに天徳帝は
奴と同しからん則李伯玉に命ぜらる李伯玉は形
儀し御天羅を擢撰と共に周旋して兵勢を
修錬して黄河口の要港淮安に出張り陣を布て淮安総内
へも此式都と遷して李伯玉は陸路味方の諸將を召して若
て曰く敵は航海の術に長じて海上の懸引自由なれども
上陸せバ我々是者臣豪傑は陸に在てハ勇力あれども
海上に浮んでハ味方の内に航海に馴る者あり、ともいふ
堪ぬ故敵するあたはずなまじ練る我奇術を以て敵と臣を
るは安けれども味方に軍艦なけれバ敵の軍艦を奪ふべう

おびえて後日の軍用に備へん宜しく敵を欺き上陸させ行
端より生捕傷く艦を奪ひんとて航海に馴る者を撰と
出一まうして備へ吾邦軍三千に和蘭砲臺の落に炮隊
の陣を護り處傷く一ハ西洋流の大筒数千挺を仕かけれ
持和に英吉利艦ハ敵に先んを越まじく軍艦を備へて置
何ぞへ抑ゆるに李泰伯ハ陣より大筒を打掛しかバ
英吉利艦も同じく迎農臼砲木を打掛まども元來李泰伯
玉りうくが軍配にて蛇形に備へし陣あるまで蛇矢の数なく
更に大熕を打掛海上より隙くに艦を多め大熕を発く
打かける李伯ハりうく時にハようしと鳴聲に下知を傳へまづバ

陣を柵と引退く英勢蹌踉あるを知りけるが敵ハ大に閑に迄
まで追くるぞ此諸び上陸して南京表へ寄と勇みん
で敵の哨船を投下しく我一ゑと上陸を此時まで伯主りく
天を仰ぐ檄文を唱ふるまでハ青天忽ち變じて黒雲空中に
充満く墨を流せるがごとく英勢ハ咫尺をも分さねバ都督慶
賈流ろくも大ふ怒るまども味方を励し大音を上て今や
晴天のごとく天變あるまじきよ敵も赤岡あるまじし呆り勢を
趣合せよく敵を討と滅多無生に驅らる不思議あるゆゑ南
京勢ハ共しよ此然へを知らずで青天にて呆かるをまく
勇士自由千り英将の罵るを咎て唱られども惑軍とゆれ

従来通商の輩にあるとも一味し此黄河口へ押寄しかり
翁蓋ゝ飛を免しかで天徳帝に二心なく属し奉らん
去ながら先達て本国へ和京加藤の義を申遣りしを彼が
不日に大軍を以攻め来らん是お陥に操り無し来乱今更
いかんともすべき中ハ以然る身本国の軍艦画不又来る時
我等此度免さるゝ報恩に命を留く理解を弁へ英帝を悉く
天徳帝に属し奉る中ハ計らひ申さんと申されば李
伯玉是を聞て先達条の定例あるべしとて新兵一万
余人武器を悉く預ケ柳天龍に二万の勢をあづけ副
へて南京に差向け軍の手配を奏せしめ我身ハ五万の勢を随

へて鼎び来る英船を防がんと黄河口に屯陣を

韃靼勝敗記巻之三終

韃靼勝敗記

四

韃靼勝敗記巻之四

○李武僖を援けて山西勢を悩まする

爰に平西王ハ[illegible]

高なり李伯玉ハ再び英吉利の軍艦を防がんとて
黄河口に留り居けるが淮南の城主王可彰といふ者李氏に
陣に至り諸軍を統しむしろ李伯玉もその方に
任せ城中に入て悉く人民の勇士を集めて柳天龍
各李伯玉が指図を受て二万の軍勢にて生捕ける
英華を呵衛して南京に至ると聞て隣の諸県ハ風靡
各これを見んとて老若男女の差別なく其の左側に

虜を淮安城に留りしより曰く王可彰と共に
軍議を論じあひより此に慶賈居と言し英吉
利後結の大軍押来らバ容易の事にあらずし又北京にも
英吉利と牒し合せしものあらバ何ぞ大軍をん陸よりも
押よせんも知れりとて此に兼ねる所の軍艦大小六十艘
艘を淮安城の外堀の入口に繋ぎ又城の門に要害の
全からざる所を修補し或々諸方に散在の者を召して軍
備を得るりなる安集に遠く山西汾州の大守劉璋
同澤州の大守曹寛なんの兩将ハ北京より淮安後結の
従ふあるよ總く城に軍勢を調練し支勢合て十万餘騎

こゝに於てあると李伯玉りそくが衛者より若しうゐ兵で到
しるとよろまで弥諸人へ言ひなるまじども海上へ英吉利天
軍となるべし王陸より十万余騎の大勢押寄るべし其余の
合戦は難義なるべし宜しく謀を設けて陸地の敵を欺
きて日を労さしめ海上の敵は我自ら討べしとて王丁彰
こうろに令して隣の土民を集めさせるに時日を移さん
中より三万人を得たり是を六手に分け一隊各五千人翟瑛
陳連等の勇将六人に士卒五十人づゝを授けてこれを
董らしめ紙猿紙幟を造り五十人に猿幟二本づゝを持せ
翟瑛陳連等の六将を呼で白桃原山に来画

子長く疑り居くに淮営の大屋を開けハ敵勢此山を攻
ざして行まよりも此地へ来るを継つゞ依て山の絶頂
に登り六ね六所に陣し卒兵また下知して壘の旗幟を飾
し緑波の声を上て今も打かゝるべき勢ひを示し夜ハ数多
の松明を照し金鼓を打鳴し敵陣近く雲梯を放し
夜討なんどの容子を見せかゝれば其の合戦をあせるべからば
あまの敵を打挫で是自ら却むとせしと細々に計策
を授けしうべ督撰陳連木の六ね桃原山へと移さ
り日おゝくして桃原山より指示のごとく六ヶ所に築き
陣をそれ俺麾を出して窺かゝるに敵ハ最も象山を押し

まり遥に山上を見上れバ山の絶頂にハ後明魏の大旗大幟
数万が東西四五十里が間ニ充満て勢の剛弱多少ハ知る
べからず劉璋曹寛ハ此体を見て大に驚きて曰朱
天徳しゆてんが軍師洪武羅孫呉の名将なるに
急に攻及べからず斯る大軍をおくも我くが前途を遮る事
いかにしても不審しさりながら廉忽の戦ひを仕掛なバ是れ
らバ准安の後詰ハ思ひもよらバ暫く兵を止め容子を見よ
とて一両日を見合せ居れども打掛る気色もなく只く勢
の加わるやうなるまゝバ劉璋曹寛の両将ハ事を計
ち早く攻討ずバ大なる患を引出さん然りとて敵の虚実を知

後明勢奇計を以て清の大軍を悩す圖

大清

さてハ賊りに軍も出しかたしとて塩冶をもつかせども敵は
山上にあれバ容易に寄り得るの能はずとやせんかくや
と評定なしけるに其夜陣屋ぞく鬨の声どつと上げ鉄炮の
音騒しけれバ夜討ぞと陣中上を下へと騒動して彼是する
中にや東雲に近付ぬれバ寂寥として人影もなしさて
狐狸の業なるかと大に憤り前夜中眠らざりしゆへ鬱々
として居る所に又山上より鯨波の声を上げ喇叭を吹立
鼓を鳴し大軍の押かゝるべき様子なれバ又敵の寄来
ると陣を整へ控ゆるに一人も討れずして手負者に及びされ
バ軍ハ明日の事と漸く寝ぬ兵粮をつかひ馬に湯を浴せ休

まちる中に其の刻限に至ると合図を発し味方の陣所を
さらずして狼煙一ツ打揚げ雲に挟みると等しく山の中段
よりて六ヶ所とも狼煙数十本打揚る其内へ兵数十里の外に
見ゆる其附まで金鼓を打鳴し討を為べき形勢殊に和兵数
又て甲冑を帯し鉄炮より玉を込備へを並し待ども合図の上
まで総兵勢も悉く所するると連日連夜に聊く怠らず務め待
略とる衆寡手に至る総の書備多くまべ日夜疲勞ると雖も軍務つ
ある巣賊には屍骸十万と唱へしも今に僅五千にも足らざりける

○英吉利勢并び敗軍の事

咸豊三年八月定海に於し英吉利の都督慶賈婁といろ

が件を差もし軍船本國よ到り北京よりの勅使定海より來
りて加勢を乞ふといへども當るによつて速ちに虎門廈門定
海三ヶ所の兵を集め軍艦六十餘艘にて乗組黄河口に押
寄南京に攻入らんと既に出帆せし翼を異国へ告來る
女帝聞して彼国の一千八百四十一年九月中旬に水師提督
薛西爾せえきゐに軍艦大小二百五十艘に軍勢十万餘騎を
従へ北京加勢南京征討を命ぜらる薛西爾せえざい遣て從
上陸し兵を惣督して出帆し既に廣東の十万邊の沖に到り
小船をもつて虎門廈門へ軍の体を探らせらるる廈門貴處
そのうち早く二万五千の軍勢にて黄河口に押寄一戦

らバ我航海の術を試んと云ければ李伯玉
暫く思惟して我軍勢皆勇壮なれども航海の術に疎しと
と慮し王可彰が望むに任せ先陣を許し味方の内
より航海に馴たる者を八千人撰み出し王可彰に授け
されバ王可彰ハ手勢を合して二万余騎已に揃へし軍
艦と共に攻登り来る所の英船よりハ打出す南蛮流西洋流打
混じて綾へ大筒を放し掛て漕出せる李伯玉ハ陸に在て
黄河口を登の浜已に所々に陣を布き台場にハ大筒を仕掛
後明の旗を風に翻らせて威儀堂々と既に王可彰ハ
船を揃へて鉄炮を打掛れども英吉利新製の軍艦ハ水

城を防ける程の堡実にてハ有る大熕と雖ども打砕く
ことなれバ其適大熕の玉の中る時ハ必ず沈没して是有り王
可彰まうろが船ハ水役と倡ふる程の軽り軽して火術も亦
英人より遥に劣りし故敵の為に三艘を打砕かれしを見て
凡へその王可彰思慮して敵の軍艦堅実なるこれ
航海火術に覚えある頭のごとく砲戦の時を移さバ味方の
船悉く打砕かるべし又力戦に及べバ彼が十万ハ我二万なり
敵するあたはじ然らバ敵船よ大筒を放し切る透見
て敵将の艦に乗移り片端より切殺をとなしつつ軍艦
敵艘を一連ふし大将の艦を目がけて乗付バ敵船片面きん

く大頭天窓を砕しく打掛大山をも崩さん勢ひにて押寄
まづハ守る所玉りく五ヶ所の陣ハ下知さ然べく陣ハ右鉄砲形なる
べし魚鱗の大首ハ畳るべく打掛よ敵上陸すまじ又ハ
鉄砲の尾をひく引包み旅されば付入れまじとくまるを昔汲にハ
中央の陣に至りて左右に心を配り王所彰ハ我後陣に
あらしめ鉄砲の秘術をもつて陣なりし事伯玉りく
まへにて左右五ヶ所に下知するの応まべハ軍配りの図なれ
しそ既に二ヶ所を敵の為に打ちくめられ陣を捨て逃亡
る芝とかくく海よりまる英吉利勢借く来を将さく之陣
後陣打廻りて皆一同に淵にに押寄て此陣より追ひくかけ

墨児蘭
火單を
欺討の
圖

依り兵形と共に臣掛る薛罽厄せいえ今ハ従軍あく降人に
なさり李伯玉りそく ここを以て共を止め提督を征め王を
のかれしん武器を取上毒ハ秘文を唱ふれバ兵形も皆
悉くきえて消失逆徒忽ち打亡ぼされハ英勢かくれバ
仰不一殺ハ数殺に奇術ありて彩る股矢を発めて我くが
大軍を挫ぎしかく倍く名帥し水師提督薛罽厄せいえ
西湖をさん李伯玉りそく不済なる故ハ是まて慶賀嫁が
済へ上傳く女帝にハ我不命じて少爺にかく務せしハ西書の
好きありて上るを済ぐまでハあり後明帝に数對する
の獨走召し取りハ天徳帝てんとく哀憐を翻て罪を許され

人を唉をつけ汝等まが心を悍らずして争論まうるハ無
礼なり然ゆゑん愈されありねども段の争論と達ハ武辺
を嗜むより起るなるまバ双方稽古槍をもつて武芸を
試みよ勝負終て後に兎角の裁許なすべしとありければ奴
方斉しく用意として庭の東西に扣へけれバ唯喇叭ざ
まら庭上にあり猪士犍側に居並び見物なし既にして相
の太鼓を打候へバ双方より柄のながさ二丈の長槍を持
て立向ひしに黒兒葉ぬるを姫めるに那しめらまさ殺怒
天狗に沛されバ今ぞ一槍に火草くんと突倒し人々の目
を驚かし恥等を悉ぐんと突出せ火草くんハ沈勇丈丈の

向ひ今支清政を執り國々の下民飢餓を免がれざるの苦患
を見るに忍びず徳く嗟喇嗟王ハ兵を挙て支清を討
下民を救んと欲するの激文を以て一味合併を勧むるも
あり嗟喇嗟王ハ是に加勢して討ちなんとす又是を持て
支清不忠を正して討たんとせしかれバ馬斯坦ハ是を
てやむるハ嗟喇嗟王ハ是より下賤なる支清皇政
日々に増長するばかり天何ぞ是を免さん既に滅亡の時至り
しなるべし然るバ嗟喇嗟王ハ是と並び立て下民をすくひ
めんハ天に順ふのみならんと疾速なれ唯嗽喇嘛らまを
略して兵を改め一変して一味同心の印籠を至る此日の大

彈定して匹也夜に入なれば此村墨児茂めらん不忠不義の心
を生じ今宵の虚に乗し大草家を討て日比の鬱憤を
散ぜんと備人よりかし集め匹出し鉄砲海の手傷なる
根穀の雑兵を隠め寝ひ待くれ斜もらぬ身の大草家には
僕不覚乱狼籍をおせつく此所を通り過るを思ひかけなき横合
より墨児茂めらんは日比の遺恨かへ新まと甚くも揉乃
手搶をもつて後ろより脊骨を掛て突き抜り大草家元来
健着なれば突きながら声を顰てヤア未練至極の墨児茂
めらん己れ匹夫の勇を侮り我不恥しめるくを遺恨にかわり
欺し討とは奇怪なりよしや傷は負たれども無慙く

地の上に付まん中と突まし鞠を手繰寄る墨児葉めるい
力の限り鞠を揺り押倒さんと挑めども元来武術力量勝
まし矢草えんが死骸の猛威に有り難くや思ひけん鞠を
捨て十く滅も剥ぎ跡を晦まし何国ともなく逃失けり

蹴鞠勝敗記巻之四終

韃靼勝敗記

五

雑難勝敗記巻之五

○草毅滑歎討斧寧古塔落城の事

扨も火草ふんどしはおのれの逃るを見えて大に怒り妙の是比良来練の纓抜めうつて低き起さべきと突覆りまくる捨の柄の生平丁と打切揺拾て平丁ぞろりと臣蔥し九初めの隆痰を目も嗜とんと剽を揺きどもそ俺て赤に側道しろ泥鰍なりきる事なく是ふ浸着ハ寫宛ふ無論り退し孫子と告られけれハ嫡子草毅滑ふんもうと先と逡より譜代の郎等を召連草鞋天色りまし式ハ悉りしまゝ子敬ハ無急しが落れバ釜何ともたべきやうくに鎮の又を床抱し割ゝの

気付を含めけるに釈子の縁の切ざりけるや僅かに細く眼を
開き悲げなる声にて薫りし時歎いは墨兜菜めらんあうと呼
一声を名残りにて瀬海野の高陽の露と消えにけり草殺滑
らんきぬともに墨兜菜めらん看くれ約し臣付て只一結と掛け
出しを浸着の閉章にて留めて血迷ひかへしつ若旦那歎いて
ありてより時刻移り臣に闇夜の事なれば何処と定むる
かやみてく親旦那の死骸を葬りそれ母君も告げ歎
と言よかとも是かしと法の言葉に涙を押へ父の死骸
を肩にかけ茅宅をさして立帰る火草が妻は亂家に
立て暮らすいうまと待居たりしが丈の有さま見るよりも

熟古今を觀るに世乱までてぞ太良勇士は顕るゝ事ニ我
朝鮮力量人に勝るといへども事なきゆへ功を顕さん事能
はず今中華に禍乱起り北京にハ勇士をえらむの風にて
顕り思ひ募するゆへ我儕儀倭と北京との里程の隔たるを
遠ければども元来北京に属せしの國なれバ此便にて拓果ん
よりハ此玉を伝て中華に赴き北京帝に服勤し武名を
天下に顕り名を後世に流さんにハ如じと思ひ立ならしを
経て此城に来りしと己が思ひを押包て識し並ゆゑ
趣きまえハ此宗族さへ志を感じ遂に帰するにも替り話
に鞋の玉くを授驚し何ぞ珍らしき無別ありやと思ひ見て南

鳳凰山の麓韓清對陣之圖

と前拝変じたる由を墨見蘭なるに言合の日を約し
て旅宿に帰し城中に名ある武藝の達人十三人を選出
け彼囓嚙嚙客囲の浪人當地に来り武勇の風評あるは流て
さる噂なし〈て當るに梁る君權を候ふて軍渾利
阿るの旨を述るに聞て日を約し試合を申付より浚ホ
選し唯權を發し孫軍用にあるべき者なれば召抱へんと欲
もその旨をふれけるや殘されしれば此十三人は皆に武を
磨く勇士なれども彼に及ばず彼浪人めを取伏て人々の
目を驚かさんと拳を握めて約定より既に其日に成されし
は大廣間の庭前に試合の場所を構へ上段の間に至尊紀

長鎗を指南するの由なりと風評しければ何も耳寄の事
なりと寄て窺はんと種々に心を砕けどもさらによるに隙
なくて日を送る所に此比鎮組より軍起り黒龍芝丹
の両城を攻落し既に寧古塔に寄来るの比にて城
中の騒動大方ならず北京へは援兵を乞ひ又軍役の人
夫は町人百姓を撰まんで所々に役所を建て十五才より六
十才迄の者を改めての役出しければ是屋喜兎のおくと
此役所に出けれ共なに仕度の旨願ひければ早速許容
ありて陣門の人足不足に入番る夜に兼て日々宿直すと
雖へども墨児業めるかへ大身ともなり宮崎よりうへ見

麻錬抜見まろらと共に儒つく備勇を切利へ既に和京乃
咽首と為む艾丹を攻落し勝ひ僅く破竹の如く是
より寧古塔を攻んと軍謀ある法王嗹喇嘛らま
席をすゝミ合を挙てより我が勢今に功を建るは臣
願くは寧古塔の城攻を某が一手に任せられよと請ハ
されバ喀爾喀王もこれも是を承諾し其身ハ艾丹
に止まりて是迄切利へ一変の兵を分て籠し且北京紫古
の後詰を防ぐなる嗹喇嘛らまは我旗下の烏斯図
うそを軍師として其勢七万余騎を引率し日を経て
寧古塔の北方鳳凰山の麓まで押行陣を布て

に物見を出し地理及び敵の容子を窺ひしかば寧古
塔には軍勢多しと雖ども要害の地にあらずと告しかば
軍師馬斯担えんうまで悦び自ら出て地理戦場の勝地を巡
見し陣に帰り喧噪喇嘛ざらはまのあるま出てあるま物見の
者より窺へしがごとく寧古塔には軍勢多く兵器も沢山
にて見ゆれども要害の地にあらざれば味方鳳凰山の支拠よ
登り眼下に城を見下し大旗を備へ敵出来ば鉄砲を一同に
打放しなば色めく所を討ば味方の損亡なくして勝利疑ひ
なし敵又城中に在て出ざして防ぎ戦に籠らば仮令要
害完からぬ平城といへども軍勢兵器多ければ士卒の損

亡ぶくして整兵に隙なるべし然してこれを延さば小京の
攫台後ろより来り味方へよく雑兵るべし若鳳凰山
の支險を敵にとられ財へ吉主を離して味方八分の弱を
と成て一丈分の場所にて軍の勝敗此一挙にあり然らば
能く敵を擾して世至て早く鳳凰山の支險をとらんとし
お速まべ噎嘛喇察らを始め皆く烏斯坦らんが脇
蒙を蔵下を兵に同じ寧古塔城中へ書を送るを
文に曰く

奉

我國属二 貴國久而虽無別心一 今帝乱政欽差諸大臣者

怠其職一虐民暴悪増長而遠及我國下民不免餓死乎怨
今帝如寇仇 帝則齊殷紂王欽差大臣亦似秦趙高輩天
命有限太清已為滅因之天降生民討之而令救民之塗炭
生民則我也貴王等属其幕下受天討者盲塞之如向猛火
我焉不傷之哉早翻心來于我陣乞降可全一命兵焚首

癸丑五夏　　嗟嚩喇嘛

と認め劉勇據し者を携へ出しかゞ勇ごくに計ふべしと
書を渡せ然害し其手に携へ僮二十騎にて馬に跨り寧
古塔城へ逃ゆる大夫の櫓より是をみて大に怪しみ敵僮
二十騎ばかりにて飛来る大旗にて打殺しんまぢとさいそく

本丸へ注進しければ執柄崔彦輝此注進を聞て歎息し
二十騎にて高麗へ発する事必ず子細あらん子細も聞
ず理不尽に打殺さば義勇なきに似て却て敵に笑れまし
んせんと櫓より事の由を尋よく下知しければ廿人ばかりの使者を
開き殿中に召て子細を問に喇嘛の使者答へて云う
我は喇嘛刹嘛より高麗へ一大事を申べき使者なり
て則ち兵を引集せり王の都に至らんとせしかば妻室中にんと
と帰りぬる又此旨崔彦輝へ注進に崔彦輝
皆く思惟し何事にもせよ子細を聞て後ち奈何ともはからべし
それ本丸へ通せよと下知しければ城門を開て安東門より本丸

これ韃靼人の勇気を挫んと上使これ豊紳王中央に崔彦邦を始め宗族曹紀白など〻して数千の勇士大廣るより極側にあるを斉四涯是の如く我武威を添へて納所に別儀らの使者往する事色多く諸臣の中を打遣り崔彦邦のおそく出て度に悉く總首して屯所に喞喇嘛ら喀爾喀王に合併して義兵を起し支那韃靼悉く攻襲け南都に押来しども南都ハ大清の高祖淳熙の地なるをもつて直に攻討んとすを斟酌し則ち此書を遣ると義士すべて宗族これを受取り開きて見るうちに後上より主将豊紳王ハ

曹叡白二万餘騎崔彦輝ハ自ら三万餘騎を
従へて正面より向ひ柴横ハ曹叡白ハ左右手
つゝる山の三方より討て掛る韃の軍師馬斯埋ハ是を
見てスワヤ敵ハ隊を出て寄来るぞ大熕を打掛よと数千
の大砲を打掛しかども隊長ハ此日の怒り㧾ならねバ是を
事ともせず牛皮の楯を先に立て此方よりも大筒をと
きどきに打掛く我よりハ此砲我に時移り日已に暮て隊
長もおし立き野陣を張る者の後へんを思ひ切りて多れ
バ陣中の悉くを許さんまづうち大おどより防く切ふせ
し用心厳重に鞑靼勢も篝を焚て用心なかりける

此時曇兒葉えんは一方のおさへとして崔彦解が先陣に
属し草鞋将と混ひ来り手きに父母の仇曇兒
葉えんを討んと付覘へどもおりもあるでくもあらずして能
りざれバ兎や角やと日夜心を苦しむるおりから主の
唯牧喇嘛ら既に此所に押寄ると聞て内心大に歓び居る
所に思ひかけざりき此陣に従ひ来りる我天の与ふる所なり
我此陣を破出て喇嘛らの陣に至り此趣を訴へ加勢を
乞て曇兒葉えんを討ち此後ぐ此所糸と臣紀さ忠孝の
二ツを全ふするの功も是より大なるハ無しと心を決し由迅
と見合せ切て二十数と取り一疋を盗に陣をぬけ出るに

大清の陣中に於て
單毅得仇討の図

術をうけたる却説鳳凰山の陣にハ卓殺得とんこあつが術
へはまりし陸喇嘛ざらい軍師馬斯姐うんと討て夜討の
人数を出しやり返まて馬斯姐うんて喇嘛ら不告くも欺
き外の幸ありて夜討をそらへども敵ハ更ら敵の示をと
を討て一旦ハ寞崩せしも味方小勢なれバ敵に消て敵勢倍
へなるバさ人も生きく帰るものまじけれバ夜の明ざる先にまた
惠軍なれバ敵の周章る所を討バ一時に寧古塔城を抜
くべし「罷ひ返し」とやるまべ計策をよしとし楽て惠軍に下
知して押出し既にして敵陣近く押寄る時ハ不意に
をりし敵陣を窺ふに崔彦輝さくぎん本陣より救ひきたり

若者のごとく五蔵も五薬しれ是を下さまじ馬おろくと蹴り
一方の郡に居し居士を譲りおいて退けらまじ此上邪古欲
是を忘れて了切まじ又讒悪邪蘭めるらんが首は海の細流せり
尋ねいへとて下さまじされば草穀得さんさめつは忠義身に算り
蔵腑袖を浸し兎角の乃悪も中ゆるぞ厚く謝して我おる
只へ立てさ肥下の忠実なる者を撰み出し悪貝蘭めるらんが首
をおさな不善の父母の墳墓を抱へしむ悪孝ある故
犬のるる又蓮は泥の中に生まて泥に染まぬ草穀得さんさめつは
小説暴の中に生まれども古人のいふ忠孝
昔も今もせしへ比ひ希なる若者也　難題勝敗記終

附録○韃靼勢天徳帝に一味合体の事

唯頼利麻ざらいより寧古塔落城の訃を急使せんと丹
に在陣の吾爾喀王うかんの陣に告ぐ續て韃靼勢寧
古塔に来會し城中に入て此度唯喇利嘛さらいの早
速なる大功を感称し次に烏新退くんしの智謀を賞美
をも亦草穀得しんこうの義卒にして右挙を励まし此度の手
柄を一ッとして数々の功を推て感状を添て賜り其余
諸軍の軍功の浅深により或は馬鞍武具珍器絹布など
ことごとく其の上大宴を催し上下数月の軍労を休め翌一日
大廣間に諸将を集め軍の意見を問ひ給ふ其上にての

従ひ又崇徳吉林遼東を以て内地に及ぶ時は天下一統の功
をなしけへと衆に同音に宣暢る時は麻辣撥兒萬歳
らそんの夷人最も静にて言葉を発く味方数月あらさるの功臣
中を平吞なしたるは靖民は大清の苛政を悪みし士は君
の義理を重んじ村は勝ち従ひ浮り気本の風に靡く如
くに従ひ又は此設のごとくに思ざる幸ひありて彩のごと
今内地には後明の天徳帝ありて民の心を得るく智勇
の士数多兵を備へて且大清の赤譜代勇功の宿将
あるべしたある時は何ぞを付る中く今との軍にて事
変り一般了又さては勝利覚束き一度敗るる時は是との

戦功水の泡となり却て世の笑ひとなるべし然る時ハ
南京へ使を馳天徳帝に一味合体の書を送りなは
バ彼もなどか承諾し我軍の合体せしを表し軍威倍て
盛ふして北京を討ん事なせり大清なまは此糧穀を備バ
なんぞ此方へ軍馬を出すの隙あらんや其間君ハ仁政を
布き民を撫育し士卒を調練し兵粮矢玉を貯へ根を
固くして時を待ち然後明恢復の大業成就せバ後は
小強ひ支那韃靼一象を成し天命を安んじめへ二虎相
争ふときハ一虎ハ倒れ一虎ハ傷く璽もおもバ替く南北
戦闘の労苦を救ひ隙あらバ其虚に乗り調練の大軍

を率て内地に攻入帝宮を華しぬへと其兵端を開く
言舌流水のごとく一点のよどみもなく述られば寄蘭
王を始め連判喇嘛ら悉皆後座の諸将あつと
討りま感嘆の声きびしく暫しも止ざりけり即時に出師を
調へ路次鉄金の中ちりまでは多人数の使者すでに渡来不
便ちりまでは熊と悉く使を以て南京に来らしむ使者南京
に至り天徳帝に一味同心の書を献る天徳帝
も承諾を合し浄室の上承諾の色猶を認め難題の使者
に数の黄金を賜り別使を添へ寧古塔へと帰しけり

韃靼勝敗記附録終